

おわりに

あるとき、ラジオを聴いていて、日本のフォークシーンを代表する人たち三人がトークをしていました。何のきっかけがあったのか、話が日本神話におよび、『古事記』の中の「三貴子誕生」（本書第三章******頁をご参照ください）が話題となりました。

左の目を洗って日の神が生まれた？

右の目を洗って月の神が生まれた？

そして、鼻を洗って海の神が生まれた？

というようなことを言って、三人で大爆笑したのです。まったく荒唐無稽な話だよな、ここまで荒唐無稽だとばかりかかしくて笑うしかないよな、とでもいうような感じで。

それを聞いて、わたしはショックを受けました。

というのは、一〇歳のとき、小学校の図書室で何気なく手にとった『古事記』の物語の

なかで、もつとも感動した場面がその「三貴子（あまてらすおおかみ天照大御神・つきよみのみこと月読命・すさのおのみこと須佐之男命）誕生」の場面だったからです。そのときわたしは、この神話伝承が宇宙生成の秘密を物語る神秘的な秘密文書のように思えて、これは宇宙的な真実を言い表わしていると直感したのです。

神話について、これほどの受けとめの違いがあることに、わたしは愕然としつつも、現代という時代状況においては、わたしのような神話理解をする者が絶対少数派であることはいやというほど認識させられました。それはちよびりさみしくもありましたが、同時に、ぼくはこの時代の大多数派に絶対屈しないぞ、という覚悟をとまなうものでもありませんでした。

そのラジオ番組を聴いてから、約四〇年か三五年が経ち、本書をビジネス社から出版する運びとなりました。わたしにとって思いがけないことは、この本が人文社会系の本を多く出している出版社ではなく、ビジネス社という経済や経営の書籍を多く出している出版社から滑降されることで、この四〇年の時の流れをとっても感慨深く思い起こすことになりました。同社部長の中澤直樹さんと、その原話の収録をしてくださった「テンミニッツT

V」編集長の川上達史さんには甚深なるお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

高名なフォークシンガーたちが笑い飛ばした神話伝承の一コマがどれほどの世界神話の深みと広がりの中にあるのか、本書で少しでもその世界の面白さや深さが伝わればたいへんうれしくおもいます。

この本を出す少し前に、わたしは出雲大社を参拝しました。思い起こせば、今から四七年前の一九七五年の春三月に、わたしはひとりで出雲大社を参拝し、そのご神前でその当時習っていた雅楽の楽器の龍笛を奉納演奏して、これから自分は神道を研究していきます、とくに須佐之男命やその子孫の国つ神の代表である大国主神の物語や儀礼や地域伝承を中心に研究していきます、どうか出雲の神々よ、見守っていてください、と祈り、誓ったのでした。

それから約半世紀、二〇二二年四月に、わたしは第四詩集『絶体絶命』（土曜美術社出版販売、二〇二二年五月刊）の再校ゲラを抱えて、NHK文化センター京都でこの七年ほど月一回『古事記』や『日本書紀』を全巻講読してきた受講生の有志の方々と出雲の地を旅

したのでした。ちなみに、この第四詩集『絶体絶命』の冒頭の長篇叙事詩は「大国主」と題し、痛み（傷み・悼み）の神としての大国主大神の存在性の深層を叙事詩形式で問いかけた、かなり変わった内容のものです。

今日出雲の旅は、その大国主神を兄神たちが赤い猪を追い落とすかと騙して、真っ赤に焼けた巨石を山上から転がし、それを山裾で受け止めて死んでしまった大国主神を祀る鳥取県米子市南部町の赤猪岩神社からスタートして、黄泉津比良坂伝承地、佐太神社・母儀人基社、八重垣神社・鏡池、神魂神社、神魂神社旧境内地の磐座群、熊野大社・上の宮、須我神社、荒神谷遺跡、出雲大社・素鷲社・命主社、島根県立古代歴史博物館、須佐神社、長浜神社、稲佐の浜、日御崎神社・灯台などをめぐりました。初日は雨でとても寒かったのですが、二日目からは雲一つない晴天で、これが「八雲立つ出雲」の地かと思われるほどの光と透明感に満ち溢れた二日間の参拝と見学をつづけることができました。

中でも、出雲大社では、一九九七年九月に音楽家の細野晴臣さんたちと行った猿田彦神社巡行祭の途次に御垣内参拝と奉納演奏して以来の御垣内参拝と、素鷲社前での石笛・横笛・法螺貝のわが三種の神器の奉納演奏と、「神ながらたまちはへませ」の奉唱も行なう

ことができ、感無量でした。この「神ながらたまちはへませ」の歌は、神道ソングライターとしてのサードアルバム『絶体絶命』（二〇二二年六月リリース）の第一曲目となる入魂の神道ソングです。

出雲の地は、神話も、『古事記』『日本書紀』などの中央神話だけでなく、『出雲国風土記』に出てくる「国来、国来」と朝鮮半島から陸地を引っ張ってくる「国引き神話」などの独自の地方神話や、銅剣三五八本、銅矛一六本、銅鐸六個が一挙に出土して日本中を驚かせた荒神谷遺跡もあり、じつに芳醇な神話・伝承・儀礼・遺跡の集積地であることであらためて深く実感させられました。古代出雲は謎も満載ですが、極めて面白い神話・伝承・儀礼も満載の神秘の国です、今もなお。

その出雲大社の神座が、本殿の建物が向いている南ではなく、わざわざ真西を向いているのは西方との密接なつながりが考えられます。出雲の真西は金官加羅国に当たります。また、『日本書紀』における素戔嗚尊は、朝鮮半島に降り立っており、そこから各種樹種を日本列島に持ち帰って、紀州の山々にその樹種を播いたとあって朝鮮とのかかわりが記載されています。なので、出雲族と古代朝鮮とのかかわり、また天皇家と古代朝鮮、さらにはそれよりも西方の民族文化とのかかわりも否定することは不可能です。

本書では、日本神話を世界神話のなかに位置づけ、関係づけながら、広く、深く、日本神話の面白さと豊かさを浮かび上がらせようと企図しました。ここで述べられたものの多くは自説で、それが学問的に正しいかどうかはこれからのさまさまな角度からの検証をまつほかありません。しかし、ここで提示したことは一つの見方であり、解釈やそれに基づく生き方のありようであり、六〇年以上にわたって神話を生きてきたわたしの生活実感の集積であることは申し上げておきたい思います。

読者のみなさまが、神話の面白さや豊かさを楽しんでいただけますよう、こころよりねがっています。

鎌田東二拝

あめつちを つなぐかけはし かみとひと
みたまむすびの ねがいととも